The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

北朝造像銘における転輪王関係の用語の出現

倉本尚徳

はじめに

転輪王は転輪聖王、輪王、飛行皇帝とも呼ばれ（以下「輪王」とする）、正法によって世界を治める、佛典において理想化された帝王である。天から輪宝（特に金輪とされる場合が多い）を感得し、これを転じて天下を威伏治化するとされる。

中国史上において、皇帝がこの佛教的帝王観といかなる交渉を有したかは興味深い問題であるが、すでに、皇帝菩薩と名乗った梁の武帝や菩薩天子と称された隋の文帝を輪王とみなす資料があることが知られており、[1] また、「輪王＝佛」の観念が具体化された最初の皇帝が則天武后であることも指摘されている。[2] ただし、隋以前の北朝時代（北魏、東魏、西魏、北斉、北周）の資料において、皇帝との関連において、輪王関係の語がいかに用いられたかを論じた先行研究は管見の限りでは見当たらない。そこで本稿においては、北朝時代の紀年を有する造像銘において、皇帝との関わりで輪王関係の語が用いられている事例を新たに紹介し、皇帝を「金輪を転ずる輪王」とみなしたり、金輪が皇帝のもとに出現することを希求したりする願文が存在することを明らかにしたい。

一　「金輪」と輪王

まず、次節で紹介する北朝造像銘でキーワードとなっている「金輪」という語の意味について検討したい。佛典においては、金輪は、大きく分けて二種の意味で用いられる。一つは、『倶舎論』や『大毘婆沙論』などに見えるもので、金輪は、風輪、水輪とともに三輪の一つであり、大地がその上に載っているとする。もう一つは、輪王が有する輪宝としての金輪である。『倶舎論』分別世品では、輪王には、金、銀、銅、鉄の四ランクがあり、それぞれの輪宝を転じ、順に、四天下、三天下、二天下、一天下を統治すると記される。輪宝は輪王のシンボルと言うべきものであり、輪王が有する七宝（輪・象・馬・珠・女・居士・主兵）の第一である。輪王となる者には「金

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

輪」が応じ来ることは、『長阿含経』『雑譬喩経』『涅槃経』など様々な経典に見える。例えば、北本『涅槃経』聖行品に、

頂生大王即作是念。我昔曾聞五通仙説、若刹利王於十五日、処在高楼、沐浴受斎、若有金輪、千輻不減、轂輞具足、非工匠造、自然成就、而来応者、当知是王即当得作転輪聖帝。（大正一二・四三八a）

とあり、王が十五日に高楼において斎戒沐浴していると、金輪が来応する場合があり、輪王となることができるという。七宝のうち、他の六宝が揃っていても輪王とは言えず、金輪を有してはじめて輪王という名を得ることは、『大智度論』巻八二・大方便品においても、

転輪聖王雖有千子八万四千小王及六宝、不得名為転輪聖王、不能飛行到四天下。若天遣金輪宝至、乃得名為転輪聖王。（大正二五・六三六a）

と述べられる。『雑譬喩経』の次の文章は、輪王が金輪を得る過程をより詳細に記したものである（『経律異相』巻二四にも収録される）。

転輪聖王所以致金輪者、帝釈常勅四天王、一月六日、按行天下、伺人善悪。四天王及太子使者、見有大国王以十善四等治天下、憂勤人物、心喻慈父、以是事白天帝釈。帝釈聞之、慶其能爾。便勅毘首羯磨賜其金輪。毘首羯磨即出金輪、持付毘沙門天王。毘沙門天王持付飛行夜叉。飛行夜叉持来与大国王。毘沙門天王勅此夜叉、汝常為王持此金輪、当王頂上、畢其寿命不得中捨。是夜叉常為持之、進止来去随聖王意。尽其寿命、然後還付毘沙門天王。（大正四・五三〇c―五三一a）

すなわち、四天王が月に六日、天下の人の善悪を監察し、大国王が善政を行っているのを帝釈天に報告すると、帝釈天は毘首羯磨に対し金輪をその王に賜与するよう命令する。金輪は毘首羯磨・毘沙門天の手を経て、飛行夜叉の手に渡り、飛行夜叉は、その王のために金輪を持し、王の意のままに進止来去するという。また、『大樓炭経』巻一・転輪王品には、輪王が金輪に飛行するよう命令する時、その前を四天王たちが飛行することを記した、

転輪王便試天金輪、即便会四部兵、往至天金輪所。整衣服、長跪叉手、持右手、指金輪使東飛、金輪即東飛。転輪王即与四部兵及家室親属悉随之飛、四天王・天上諸天、皆亦在金輪前飛行。（大正一・二八一a）

という記事もあり、金輪が輪王にとって非常に重要な役割を果たすことがわかる。

二　北朝造像銘に見える輪王関係の用語について

筆者がこれまで収集した北朝時代の有紀年造像銘における輪王関係の語の初出は、雲岡石窟第一一窟東壁にある北魏太和七年（四八三）邑義信士女等五十四人造像記（水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』京都大学人文科学研究所、一九五二～一九五六

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

年　第二巻所収「雲岡金石録」NO. 4）に、「上為皇帝陛下・太皇太后・皇子、徳合乾坤、威踰転輪、神被四天」と見えるもので、これは皇帝たちの威光神徳が輪王を凌駕し、四天下をおおうことを願うものと解釈できる。皇帝を「金輪を転ずる輪王」になぞらえようとするのは、遅れて北斉天保八年（五五七）趙郡王高叡定国寺碑（顔娟英主編『北朝佛教石刻拓片百品』中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年（以下『百品』と略）一五二頁）に、「属大斉之馭九有、累聖重規、羲軒之流、炎昊之輩、出東震、握北斗、撃玉鼓、転金輪」と見えるのが管見の限り最も早い。また、北斉皇建二年（五六一）陳神忻七十二人等造石室記（『百品』一七八頁）には、「并州楽平郡石艾県安鹿交村邑義陳神忻合率邑子七十二人等、敬造石室一区、今得成就。上為佛法興隆、又願皇帝陛下、金輪応庭、聖祚凝遠」とある。この願文で特に注目されるのが「金輪応庭」という語で、前節の内容をふまえれば、この語は、金輪が朝廷に来応し、皇帝が輪王となることを願うものと解釈できる。この造像記は、山西省平定県の開河寺石窟に存在するが、この石窟は、鄴都と別都晋陽を結ぶ、皇帝が頻繁に往来した幹線道路沿いにあったこと、造像記が石窟の窟門上部に有り、外側に向けて造られているという特殊な構造をとることが知られており、皇帝に見られることを意識したものと考えられる。(3) この造像記の供養者の肩書としては「当陽像主」が二名、「斎主」が六名、「八関斎主」、「香火主」、「邑主」、「輪王像主」、「衝天王主」が各一名、「邑子」多数が見られる。特に「輪王像主」とあるのは、「金輪」が輪王の金輪を指すことの裏づけになろう。次いで、北斉大寧二年（五六二）彭城王高浟修寺碑（『百品』一八〇頁）には「上奉皇家世祀、共円□周、久隆基興、方地斉固、乗宝殿以飛空、駕金輪而傍転」とあり、これも皇帝が金輪を転じ飛行する輪王であることを願うものである。さらに、北斉武平三年（五七二）唐邕刻経記（『百品』二五二頁）には、「我大斉之君区有、義在不思、家伝天帝之尊、世祚輪王之貴」とあり、北斉皇室が代々輪王の高貴さを受け継いでいると述べている。最後に、北斉末の武平七年（五七六）楊安都五十人造像記（北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』中州古籍出版社、一九八九年、第八巻七八頁）には、「昔波斯慕聖以鉦霊容、育王建塔而図妙状、是以都邑主楊安都合邑五十人等皆至心聡穎、解識无常、遂磬竭家珍、敬造碑像一区。□営无闕、今得並就。以此微因、仰□□帝祚永延、金輪曜世、又願七世蒙沢、常遵正化」とあり、これも皇帝が金輪を有する輪王であることを望むものであろう。

以上、北朝造像銘において、皇帝を「金輪を転ずる輪王」とみなし、または、皇帝に金輪が来応し輪王となることを願うものがいくつか存在し、特に、北斉王朝の紀年を有するものに集中することを示した。なぜ、北斉時代に集中して現れ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

るかは、梁の武帝や隋の文帝の佛教的皇帝観との比較を通じて明らかになると思われるが、この点については、稿を改めて検討したい。

1　顔尚文「梁武帝受菩薩戒及捨身同泰寺与〝皇帝菩薩〟地位的建立」『中国中古佛教史論』宗教文化出版社、二〇一〇年、山崎宏「隋の高祖文帝の佛教治国策」『支那中世佛教の展開』清水書店、一九四二年。

2　康樂「転輪王観念与中国中古的佛教政治」『中央研究院歴史語言研究所集刊』六七―一、一九九六年。

3　この石窟に関する詳細な歴史学的研究として、侯旭東「北朝并州楽平郡石艾県安鹿交村的個案研究」『北朝村民的生活世界――朝廷、州県与村里』商務印書館、二〇〇五年がある。

（本研究は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「アジア諸地域における佛教の多様性とその現代的可能性の総合的研究」（平成二二年度～二六年度　龍谷大学）による研究成果の一部である。）

〈キーワード〉　転輪聖王、金輪、北朝、北斉、造像銘、四天王

（龍谷大学アジア佛教文化研究センター博士研究員）

新刊紹介

服部　弘瑞　著

『原始仏教に於ける涅槃の研究』

A五版・六六二頁・本体価格一七、〇〇〇円

山喜房佛書林・二〇一一年四月

NII-Electronic Library Service